



愛知淑徳大学

## ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES

## Newsletter

第48号

URL=<https://www.aasa.ac.jp/institution/igws/index.html>

発行年月日: 2019年10月25日  
 〒480-1197 愛知県長久手市平二丁目9  
 Phone 0561-62-4111 ex.2498  
 FAX 0561-63-9308  
 E-mail: igws@asu.aasa.ac.jp

## IGWS 第48号ニュースレター目次

○第37回定例セミナー報告	1～2
○第37回定例セミナー学生感想文	3
○「ジェンダー・ダイバーシティ表現演習」第3回成果発表公演のご報告	4～5
○新所長挨拶	5
○エッセイ: 思い込みからの脱出! “越境する”実践者、そして“越境する”研究者として。	6
○エッセイ: 「Voice」とジェンダー: 舞台芸術におけるジェンダーの反映	7
○第38回定例セミナーのお知らせ	8

2019年6月17日に、第37回定例セミナー「オトコの変え方・変わり方—ケアという視点で考える—」を開催しました。以下、その概要をご報告いたします。

## 第37回定例セミナー

オトコの変え方・変わり方  
—ケアという視点で考える—

講師 平山 亮さん

(東京都健康長寿医療センター研究所 研究員)



今回のセミナーは、東京都健康長寿医療センター研究所の平山亮先生をお迎えした。「中年男性の人間関係」から「中年男性とその高齢親との関係」を研究するうち、介護について取り上げるようになったとのこと。本日の講演で考えてみたいことを3つ挙げてくださった。

1. 「女は女らしく」、「男は男らしく」という現実はどうのようにできているのか。
  2. ケアをする男性を私たちはどのようにみているか。なぜそう見るのか?
  3. 今まで女の仕事と思われていたケアをする男性は「新しい」存在なのか。今までの「男」から解放されたと言えるのか。
- 1) ジェンダーとは社会的、あるいは文化的に作られた性別であり、女・男についての「ふつうこうだね」と思うこと。また私たちは誰かにとっての友人、誰

かにとっての恋人、など他の人との関係性での役割に関連した規範をもつが、その中で性別に関連する規範が性役割である。性役割を繰り返し学習し、身に付けて内面化することで、女性は女らしく、男性は男らしくなっていく、…というのが本当なのか? 実





は日常生活の中でおかしいところがいっぱいあるはず。そもそも女と男、それぞれの性役割はきちんと分かれているのか。

例えば「白い巨塔」は医学部内の権力闘争のドラマであり、政治の世界でも会社でも、男の世界でよくあるよね、とされる。一方「大奥」は女性社会の権力争いの話だが、女性「あるある」として人気がある。

実は「白い巨塔」と「大奥」は同性相手に闘争し、グループを作って相手を蹴落とすという点で、質的に同じであるにもかかわらず、それぞれに男の世界、女の世界ではよくあるよね、といわれる。ではこの登場人物たちの行動は性役割を内面化した結果といえるのだろうか、というところではなく、私たちが男とは、女とは、という思い込みを持ってしまっており、そこに当てはめて解釈しているだけなのである。性役割は行動そのものではなく、それをどう見るか、解釈するか、ということによっていえる。2) ケアというものは、かなり管理的、支配的である点に注意する必要がある。ケアの要件は「される人」の依存であり、ケアをする人がいなければすぐに生活・生存が続けられなくなるのだが、相手を思うままにすること、思うままにできることがケアと支配との共通点で、ケアと支配は似ている。

家族のケアに熱心な男の人は、「家族思いのお父さん」「優しい息子さん」などいい人／男性として特別な存在に思われてしまう。では普通の男性や男らしい男性にはケアは難しいのだろうか？実は亭主関白の夫のほうが、妻の介護にうまく適応するという。亭主関白の夫にとって、相手の生殺と奪権をにぎること、主人として相手を管理するということは、これまでの支配とマッチするからである。亭主関白の夫にとっては介護もケアも相手を支配しているにすぎないが、男であるがゆえに「優しい、家族思い」と思われるかもしれない。これは内面を推測して事実を解釈しているに過ぎない。息子介護を研究していると、相手が歩けないのに「脚力の訓練だ」といって引きずり回す、などどうみても虐待と感じる介護があるが、周りはそう解釈しないのも同じことである。

では支配とケアは分けられないのか。この人のことは最終的にはわからない、ほんとにこれでもいいの

か、この人の望んでいることなのか、という思いを持ち続けられれば支配にならない。どんなに弱い相手であっても支配しないことは可能であり、男子にこそ実践してほしい。男子は優しいと思われる基準が低く、支配に陥りやすいからである。ひとたび「優しい人」になると支配も容認されやすく、こと女子との関係において重要である。女子は「女の子らしくない」と思われないために思っていたことを言えない、反対できない、といった状況も十分あり得るため、同意の有無にかかわらず、男子は常にそれでいいのか確かめる必要がある。

3) 性役割は行動のルールと思ってきたがそうではなく、女と男の「見え方」自体を作るのが性役割であり、女(男)は女(男)らしく行動している、という現実感、リアリティは自分たち自身が作っているのかもしれない。

ケアをする男性＝優しい・特別と思ってしまう、が必ずしもそうではない。実際、ケアをする男性は増加しているが、そのことは男性のあり方を変えたとはいえず、男性が性役割から解放されたとは言えない。

主人としてケア(支配)をする男性はいるが、これまでの男の生き方とは変わってきたからケアをする人が増えたわけではないのである。「人にはわからない部分がある」という点を常に忘れずに、支配の関係から離れたケアの関係を築けてこそ、男性が変わったといえるのではないか。

最後に一般参加の女性から「これから先、息子・娘から介護を受けるようになったことを想像するといやな感じがする。その原因は「自分は支配されたくないのだ。」ということがわかった。」という意見が出た。(文責 IGWS 運営委員 前田 恵子)

愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所主催 第37回定例セミナー

# オトコの 変え方変わり方

— ケアという視点で考える —

イクメンや男性介護者など、家族をケアする男性の増加は、男女のあり方をどこまで変えたのでしょうか。この講演では、男性とケアに対する私たちの見方を問い直し、表層的なジェンダー平等観に陥らない道を探ります。



講師 ◆ 平山 亮さん  
(東京都健康長寿

医療センター研究所 研究員)

東京都健康長寿医療センター研究所、福祉と生活ケア研究チーム(介護・エンドオブライフ研究)研究員。1979年神奈川県生まれ。2011年オレゴン州立大学大学院博士課程修了。Ph.D. (Human Development and Family Studies)。専門は社会学、ジェンダー論。現在は中高年齢の親子関係と高齢者介護をテーマに、男性とケア、男性のケアの問題を研究。

日時 : 2019年6月17日(月) 13:30~15:00  
場所 : 長久手キャンパス 7号棟 7B2教室  
入場無料! どなたでもご参加いただけます!

◆主催・問い合わせ先  
愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所 長久手キャンパス、8号棟4階  
Tel: 0581-62-4111 内線2498 E-Mail: igws@asu.aasa.ac.jp  
https://www.aasa.ac.jp/institution/igws/index.html

◆ポスター制作  
愛知淑徳大学  
創設委員会  
1年 小林 奈央

## 学生感想文

伊藤 めぐ

今回の講演会に参加して私はイクメンや男性介護者に対する考え方、男性だけでなく女性も性役割、男らしさ・女らしさについて認識を変えなければならないと思いました。

私の今までのイクメンに対するイメージは「優しいお父さん」、「できた夫」でした。しかし、平山先生はこの認識が間違っていると指摘しました。確かに、女性が育児、家事をしても何も称賛はない。そして、結局は女性の社会進出が進んでいる中、無償労働である家事の大半を女性が支えています。また、調べてみるとイクメンとは「育児をする男性（メンズ）」の略称のことで、イクメンという言葉が生まれてしまうほど今まで男性はほとんど育児をやっていなかったのかと思うと残念に思いました。

平山先生曰く、男性は仕事、女性は家事というふうになり性が決まってしまうのは、身近な人とのやりとりを通じて性役割を内面化してしまうからだとのことです。親や祖父母たちに「女の子だからピンクのスプーンね。」「男の子だからブルーのお箸ね。」と私や弟も言われ続けた記憶があります。女の子だからピンク、男の子だからブルーと誰が決めたのか、今考えてみると根拠、明確な理由がありません。私はピン

クではなく、昔から緑が好きでプリキュアではなくウルトラマンが好きでした。私のような人は沢山いると思います。しかし、わざと親たちも男女の差別化を図っているわけではなく、社会的に作られた性役割を自分たちで内面化してしまっています。

また、私が衝撃を受けたのは、平山先生の「ケアと支配は紙一重」という言葉でした。ケアにはプラスのイメージしかありませんでした。しかし、ケアという支える目的がなくなり、人の行動や生活を制限させると支配になってしまう。家族内で支配的なケアが行われていても表面化しづらいということを知り、私は恐ろしく感じました。されている側は本当にケアされたいのかと考えたことはあるだろうか、家族だからケアするのは当たり前なのだろうか。相手のためを思っている行動が本当に正しいことなのか。家族であっても常に相手の気持ちはわからない。

私達は性について簡単に物事をとらえていないか。思ったより複雑で、当たり前ということはこの世にはない。今後生きていくなかで、私達が生きやすくなるように少しでも性役割の概念をなくし、男女で区別するのではなく、一人の人間としてとらえていく必要があると思いました。（創造表現学部創造表現学部1年）

平田 暖乃

今回のお話を聞いて、なぜ男性が他者の介護や育児などのケアをすると「優しい」と過剰に評価されてしまうのか分かった。しかし男性に対してそのように思うのは、昔ではあり得ないことなのではないかと感じた。今でこそイクメンや家事に積極的な男性が、多くの場合にプラス評価されるが、男は仕事、女は家事といった性別による社会的な役割が明確であった時代では、現代ほどそのような家庭的な男性がよい意味で大きく取り上げられることはなかったと思う。そう考えると、男性自身の在り方はあまり変わらなかったのかもしれないが、周りの人たち（社会）の見方は変化してきたのではないかな。

それでは、男性自身の在り方を変えるためにはどうすべきだろうか。ここで、なぜ介護や育児を積極的にしない男性がいるのかについて考える。これには今回講師の方が仰っていた「私たちが男女それぞれの性役割にとらわれて男らしさや女らしさを勝手に創り上げてしまっている」という理由もあるが、私は男性が仕事、女性が家事といった役割分担が「効率的な生活

として成り立ってしまっているからだと考えた。もしそうでなければ多くの家庭は別の形態をとっているだろう。

ではなぜ男性が仕事、女性が家事をするのが「効率的な生活」となっているのか。これは給与が男性の方が高いからである。現在、企業に勤める男性は、女性に比べて産休や育休をとらないことが多く、結婚や妊娠などで退職したり、子供の急病や行事などの理由で欠勤したりすることも少ない。こういった理由から企業は男性に重要な役職を与えたがる。

この社会的問題を解決するためには「女性の雇用促進」などといった単純なものではなく、性別に囚われない生活をした方が「効率的な生活」となる仕組みづくりや、男女問わず雇用、昇進したほうが企業にとっても経済的となる仕組みづくりが必要であると思った。例えば、家計や企業への補助金制度、扶養に関する法律の見直しなどが挙げられる。こうした対策が育児や介護に男性が積極的に参加することができる社会を作っていくのではないかなと思う。（文学部国文学科2年）

## ご報告

# 「ジェンダー・ダイバーシティ表現演習」第3回成果発表公演のご報告 星空ブレンド

本学の全学共通履修科目として、ジェンダー・女性学研究所から提供している科目のひとつ「ジェンダー・ダイバーシティ表現演習Ⅰ・Ⅱ」は、ジェンダーをテーマに演劇を創作するユニークな授業です。今年も8月31日（土）に、名古屋市・大須にある七ツ寺共同スタジオにて成果発表公演を行い、学外の方も含め、92名の方に作品をご覧いただくことができました。

今年は、この科目を履修した学生さんたちの、公演直後のコメントの一部、および一般の方からお寄せいただいた感想の一部を抜粋してご紹介します。



## ○履修学生のコメント（一部抜粋）

- ・なかなか話すきっかけがない性について、それぞれの意見を聞くことができ、自分の考えの幅を広げることができました。この授業を受けてよかったです。（平岩美里）
- ・いろんな学部や学年の人としがらみがなく過ごすことができ、いろんな考えの人と意見を交換できてよかった。将来についても少し考えることができた。（舞）
- ・大学に入ってちゃんと自らもっと学びたいと思ったし、ほんとに人生で一番、授業が楽しかった。この授業はメンバーと密に関わるため、メンバーの人間性や人生や価値観や考え方にすごく刺激を受けた。授業を受けて、少し性の壁がなくなった気がする。（山田泰孝）
- ・「演劇ができるから」と軽い気持ちで履修した授業でしたが、軽い気持ちであったのを後悔するほど、自らの性について考えさせられる授業でした。様々な性別、年齢の方々と関わり、時間をかけて意見交換できたことは、自分のこれからの人生で大きな意味を持つと思います。（あーずー）
- ・「ジェンダー」に対する考えの視野が広がった。人にはそれぞれの人生があることを知り、それらの生き方や道、経験から自分を生成していることを感じた。ジェンダーに関する人の気持ちを尊重することは大事だと感じた。（こん）
- ・この授業を受けてから性について考えることが増えました。今までは自分は女！女の子なんだから女の子として生きた方が幸せじゃん？という凝り固まった考えにしばられていたけど、他の人や先生方などの考えにグループワーク等を通して沢山ふれて、多くのことを学びました。（高柳郁美）
- ・今まで漠然とした感覚で「女として扱われること」を少し嫌だと思っていたが、この授業を受けて、演劇を作って、アイデンティティの個々での違いや価値観の違いがあたりまえということ、あってもいいということを知った。（中村和楓）
- ・様々な視点からグループワークを重ねることで、ジェンダーについての理解が深まりました。「女だから～するべきだ」とか「こうあるべきだ」とかいったジェンダーの偏見について、普段疑問に思っていたことを仲間と共有・共感しあえたことも、この授業を受けて良かったと思った点です。座学だけでは学べないことを学べた貴重な授業でした。（手塚桃香）



- ・多くの人がプライベートな情報を交換し合う空間だった。とても不思議な雰囲気だったが、すごく他人を近くに感じ、自分が受け入れられている気がした。この科目を受けて良かったと思った点は、同世代の人々がすごく多様で豊かな体験をしていることを知れたこと。プライベートで、自分の深い部分を共有し合うことで、他人を気持ちよく受け入れることができたことです。（柴田晃希）
- ・「ジェンダー」に対して、みんなで話し合っ、考えて、悩んで、真剣に取り組んでいく中で、様々な矛盾とか、いつまで話しても答えが出ないところが

難しい問題なのかなと思いました。でも、考え続けることで視野が広がるし、人に優しくなれる気もするので、答えが出なくても考え続けることはこれからもやめたくないと思いました。(野々山晴那)

- ・去年、ジェンダー・ダイバーシティの公演を見て、自分もやりたいと思って。できて良かったです。(チュータロ)



### ○参加者アンケート (文末の ( ) 内は年代)

- ・「あなたの性別は何ですか?」という問いに、自分では考えつかなかった答えもあって、とても考えさせられました。なにをもって男・女とするのか、明確な答えはないのだと感じ、男・女にこだわらず「自分」という性別を持ちたいと思いました。(10代)
- ・大学での授業として大変良質な取り組みをなさっていると感じました。素晴らしいと思います。(20代)
- ・みずみずしい出演者の皆さんの思いや考えや日頃の性に関する「これってどうなの?」という疑問がちりばめられている心象群像劇として観ました。皆さんとても等身大で素敵でした。若き世代の皆さんが、旧態依然とした古い価値観・性差別について思いを巡らせ、こうしたワークショップの成果として70分の作品に仕立て上げたことは、各々の経験としてとても貴重であると共に、財産になると思います。(30代)
- ・面白かった。全員がうまく出番があり、一人ひとりの顔が見られて良かった。今回は男子の視線が入っていたのでバランスが良く感じた。(40代)
- ・星5つをつけます! ユーモアあふれる演出、台本ですが、その中に、大切なことへの気づきがたくさん込められていました。もっと多くの大学に、ジェンダーやセクシュアリティを学び研究するところが増えていくことを、ますます願う気持ちになりました。それほど、この演劇でジェンダー教育の成果を感じました。また来年が楽しみです。(50代)



## 新所長挨拶

ジェンダー・女性学研究所長 宮田 Susanne (健康医療科学部教授)

2019年度より、渡辺かよ子先生の後任としてジェンダー・女性学研究所の所長を引き受けさせていただくことになりました。本研究所は本年で24年目となり、様々な講演会や研究会を始め、図書館の閲覧サービス、授業科目の提供まで、広い範囲での研究活動・教育活動を行なっています。さらに昨年からはスタートした「ジェンダー・ダイバーシティ」をテーマとした研究プロジェクトでは、様々なバックグラウンドを持つ本学の教員9名がジェンダーについて研究を行っています。その成果は今年度中に出版される予定で、本研究所発信の書籍として3冊目となります。

前任者の先生方および運営委員の先生方に励まされながら、少しでも力になればと思います。どうぞ指導ご援助よろしくお願いたします。

## エッセイ

# 思い込みからの脱出!

## “越境する”実践者、そして“越境する”研究者として。

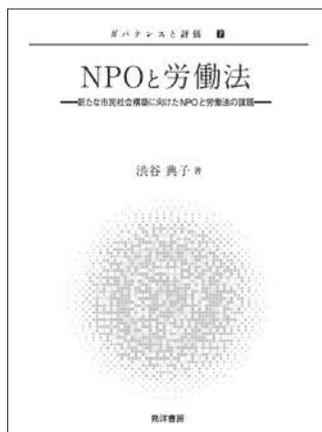
渋谷 典子

### 学位取得と書籍出版

人生のこれまでを振りかえると、思わぬ展開が待ち受けていて、常に「思い込みからの脱出!」を繰り返していた。思い込みとは、わたしたちが自明と思いつているような価値観や社会通念である。

2005年のこと、わたしはNPO法人参画プラネットを設立し代表理事となり、自治体施設の指定管理者事業を担う機会を得た。施設のセンター長を務め、事業を推進・実践するうえで、さまざまな問題に直面することが多く、問題発見志向をもつこととなる。

そしてその後の2019年6月、『NPOと労働法—新たな市民社会構築に向けたNPOと労働法の課題—』<sup>1</sup>の出版に至った。この書籍は、名古屋大学大学院法学研究科に提出し、2018年3月に博士(法学)の学位を授与された博士論文に加筆修正をおこなったものである。



### 思わぬ展開へのプロセス

横浜で生まれ育ち、高校卒業後、4年制大学へと進学した。人生に転機が訪れたのは、1993年、37歳のとき。友人に誘われてめぐりあった女性グループで「女性学」に出合い、さらに学びを深めたい、「社会人として再び大学で学びたい」と無意識に越境への一歩を踏み出したのかもしれない。

1998年、特定非営利活動促進法が、翌年には男女共同参画社会基本法が成立。この二つの法律が、わたしの人生を思わぬ展開へと導いた。2003年春、名古屋市は名古屋市男女平等参画推進センターを開館するための準備を進めていた。その施設の事業運営をNPO法人に委託することとその公募が決められた。対して、わたしが所属するNPO法人も応募し提案のプランが選ばれた。そして、センター長を任されたわたしは、ボランティア主体で運営していたNPO法人が、「人を雇う」ことを前提とした自治体との協働事業に取り組む過程で起きる問題に向き合わなければならなくなる。実態は厳しい状況であったが、思わぬ成果も得られた。そのひとつが、前述の書籍である。

### 事業運営と大学院入学

大学を卒業して30年後、2005年4月に名古屋大学大学院へ入学。センター長として実感した矛盾、齟齬

等を解きほぐしたいという思いから、「NPO活動者」と労働法をテーマに研究したい。そう、決意したからである。よく考えてみると、わたしの人生に「人に雇われて」働くことは当然の選択肢(思い込み)としてあったが、「人を雇う」側となることは全く想定外であり、さらに、事業運営に取り組む過程での課題を解決したいという志をもって大学院への入学が現実となることも、思わぬ越境であった。まさに、「思い込みからの脱出!」をしなくてはならない瞬間を経験する。

### 実践と研究をつなぐ、越境する

NPO活動をフィールドとしているわたしは、大学院入学を機に「実践研究者」となった。NPO活動(実践)と労働法(研究)との相互の境を越境しつつ、博士論文を執筆する日々は、「人生の長い宿題」に向きあう貴重な時間であった。

「わたしたちの母の時代は戦争によって学問を断たれ、祖母の時代は女性であることによって学ぶ機会から疎外されていた。そして、今—わたしたちは、自ら学びたいという切実な気持ちに押されて大学院の門をくぐり、しなやかに、したたかに研究を続けている」と、編著『女性たちの大学院』<sup>2</sup>のあとがきに記している。

2017年度から、愛知淑徳大学で「ジェンダーと社会」の非常勤講師を担当している。わたしの講義のキャッチコピーは、「思い込みからの脱出!」。講義の最終回には、学生たちがジェンダーを広めるためのキャッチコピーを考える時間をつくっている。ここに、2019年度前期のキャッチコピーを紹介したい。

「いつまでもあると思うな 男性主権」

「ジェンダーは『らしさ』の呪縛」

「働きやすいと生きやすい」

学生たちとともに、さまざまな方向からジェンダーをテーマに「思い込みから脱出!」する時間を過ごし、実践と研究を越境する充実の日々が続いている。

(本学非常勤講師、特定非営利活動法人参画プラネット代表理事)



1 『NPOと労働法』(渋谷典子、晃洋書房、2019年)

2 『女性たちの大学院』(須藤八千代・渋谷典子編著、生活書院、2009年)

## エッセイ

## 『Voice』とジェンダー：舞台芸術におけるジェンダーの反映



川上 綾

ミュージカル人生の出発点は、幼少時代を過ごしたシンガポールで、その当時は、現代の街並みから想像できないほど緑に溢れ、のどかな野生動物の楽園だった。娯楽といえば3局ほどのテレビ局が午後3時頃に放映を開始し、22時には終了してしまう。共働きの両親の帰りを待ちながら、よくビデオ鑑賞をしていた。ある日、父からウエストサイドストーリーのビデオを渡され初めて見た瞬間から、美しくチャーミングな主演女優ナターリー・ウッドに魅了され、舞台上でマリア役を演じることが私の夢となった。これが役者としての長い旅の始まりである（歌のシーンのみ代役だった事実は、大人になって知ることになる）。

その数年後、シンガポール最大の劇団が『サウンドオブミュージック』の上演を発表し、子役の一般オーディションが行われた。親友に誘われオーディションに行き、運命のいたずらか役をもらえたのは私のみだった。プロの舞台に初めて立ったあの時の感動は色褪せることなく、ライトを浴びた時の高揚感や観客の声援と賞賛は、舞台上に立つと今でも鮮明に蘇ってくる。

しかしそのシンガポールの初舞台から30年以上、数々のミュージカルやオペラ・演劇で役を演じた経験上、ソプラノ歌手として活動していると、どうしても役が限定される事実と直面することになる。勿論ソプラノに限った話ではないのだが、特に女性の役柄はその傾向が顕著であると感じる。歌手と役者の棲み分けを常に意識する私にとって、この事実は時にストレスとなってしまうのだ。ミュージカルでソプラノ歌手の役と言えば、清純な少女や純真な若いメイドで虫も殺さないような大人しい性格、反対にアルトやメゾソプラノになると、セクシーで官能的、より強いキャラクター設定となる。それとは裏腹に、若い頃の私はセクシーで時に「悪役」のような役を貰うこともあった。

二十歳の時に受けたウエストサイドストーリーのオーディションで、マリアとアニータ両方の台本を読み合わせた結果、アニータ役を提案されたのが良い例である。純真な役柄のマリアより、アニータのセクシーでパワフルな役柄が合っている、と判断されたようで、結局、マリア役の話が出たの

は、審査員が私の歌を聞いた時のみだった。甘くピュアな声と賞賛された自分のソプラノに不満があるわけではない。しかし、この両極端な個性に苦しめられたのも事実で、この時から少しずつアーティストとして方向転換をしつつ、大好きなミュージカルというジャンルで役者としてより幅を持たせ、より複雑な役を演じることに情熱を傾けてきた。皮肉なことに、初めて自分が書いたミュージカル作品では、ソプラノを歌う役柄が、純情かつある意味夢見がちな女性だった。最終的には全て書き直し、登場人物全員により広いニュアンスを持たせ、自分の役も含め声質に関係のないキャラクター設定にしたのだが、正直とても苦戦した。作品を書く時に知らないことを書くことはできない。伝統的なミュージカルの世界にいた自分の経験と逆行する作業、未経験のことをするのは容易ではなかった。声質とジェンダー、特定の性別や役に合うと感じる声、長い歴史が作ったであろう伝統を、そう簡単に覆すことは難しいと痛感した。このテーマへの正解は未だ見つかっていない。しかし全ての舞台において、新たな表現方法の可能性に最大限挑戦し続けていきたい。

現在日本で劇団 THEATER IRIDESCENCE を主宰し、芸術総監督として活動する中で、多くの女性にもっと幅広い役を与えたいという思いがある一方、最小限の稽古時間で質の高い劇団を運営していくという課題に度々直面する。周囲に目を光らせ、才能ある役者獲得と同時に、女性目線でも楽しめる演目を模索している。これまで演劇界で知り合った男性といえば、男性が活躍する物語の脇役やお飾り役しか女性に与えなかったのだが、では自分は果たして女性のみが活躍する物語を書きたいのだろうか？

そんな葛藤を覚える中、東京の新国立劇場で『骨と十字架』のプレビュー公演を観る機会に恵まれた。社会派で新世代の女性劇作家・野木萌葱氏脚本、今シーズンから新国立劇場の芸術総監督に就任した小川絵梨子氏演出で、日本の演劇界最先端に行く名作と称賛されている。5人の男性司祭が各々の思想や信念の間でぶつかり合う、いわば男性主体の物語であり、5人の才能ある俳優によって筋肉隆々の男性達が見事に演じられていた。しかし女性らしさが皆無という訳でなく、脚本や舞台構成の視点からもそのバランスの良さに大きな感動を覚え、心の奥にあったフェミニズムと芸術に関する疑問や葛藤への答えを見つけた気がした。その後ゼミに持ち帰り、フェミニズムやフェミニストの定義について学生と議論を行った。男性の物語で、エネルギーに輝く女性二人の「voice (声)」は、これからも私の中に留まり続け、思考の原動力となるだろう。

(交流文化学部講師)



## 第38回定例セミナーのお知らせ

### 脳の性差と社会／脳の男女差について科学的に考える

脳に男女差はあるのでしょうか？性差がある場合、どのような性質のものなのでしょうか？本セミナーでは、脳や認知の性差、社会に潜むジェンダーバイアスについて、科学的知見に基づいて概説し、社会のあり方を考えます。

**講師** 四本 裕子さん(東京大学大学院総合文化研究科 准教授)

**日時・場所** 2019年11月19日(火) 9:30-11:00 長久手キャンパス  
13:30-15:00 星が丘キャンパス

\*どなたでもご参加いただけます(事前申込み不要、参加費無料)。詳細についてはチラシ・研究所ホームページにてご確認ください。研究所までお尋ねくだされば幸いです。

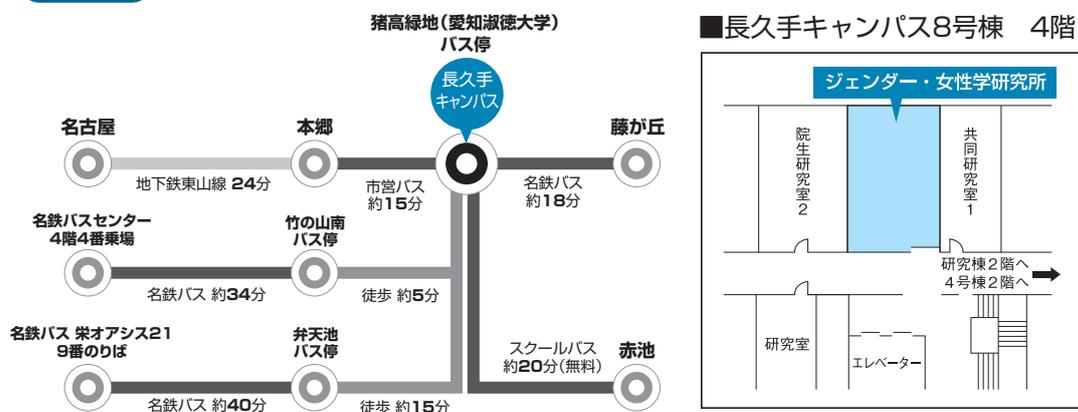
## 施設利用案内

どなたでもお気軽にお立ち寄り下さい。一人でもお友達と一緒にでも大歓迎です！

**開室日** 毎週月曜日～金曜日 **開室時間** 9:00～17:00

**場所** 愛知淑徳大学長久手キャンパス8号棟 4階エレベーター前

### 案内図



### 編集後記

今年の夏は、とりわけ歴史を学ぶことの大切さを痛感しました。弊所にも、1995年の開所以来、さまざまな歴史を扱った書籍のコレクションがあります。なかでも「戦争と女性」や「慰安婦」は重要なテーマです。若い世代へ向けて、広く学ぶ機会を保障することが、弊所の、より重要な役割になっていることを感じています。(中村奈津子)

### ASU・IGWS2019年度

運営委員

宮田 Susanne(所長兼) 小倉史 小野美和  
金南咲季 坂田陽子 佐藤朝美 Mika Toff  
平林美都子 藤木美江 前田恵子

事務担当

中村奈津子